

学 界 消 息

第一回東南アジア歴史家国際会議に
出席して

板 垣 與 一

一 参加した国と人々

一九六一年一月十六日から二十一日までの一週間、シンガポールのマラヤ大学で開催された「第一回東南アジア歴史家国際会議」(First International Conference of Southeast Asian Historians)に、私は日本学術会議から派遣されて出席した。日本からは私のほかに、京都大学の猪木正道教授、オランダ留学から帰途にあった天理大学の中村孝志教授、それにマラヤ大学に留学中のアジア経済研究所研究員長井信一氏が参加された。ジェトロのクアラ・ Lumpur駐在員として赴任の途にあった須山卓博士も出席の筈であったが、ついに間に会わず欠席された。したがってこの会議への日本からの参加は四名にとどまった。

この会議へは欧米アジアをふくめて全部で二十一ヵ国、参加

者は百名を越えた。提出されたペーパーの数も五十三で、この種の国際会議としては一応の成功をおさめたといつてよい。第二回目の会議は三年後すなわち一九六四年に開催される予定である。開催地がジャカルタになる可能性は強いけれども、決定は組織委員会に一任された。

会議における報告やそれに関連して論議された問題点に立入る前に、まず参加国や参加者について述べておきたい。参加国の中でアジア以外の国としては、アメリカ、イギリス、オランダ、ポルトガル、オーストラリア、ニュージーランドの六ヵ国、アジア諸国としては、インド、パキスタン、セイロン、ビルマ、タイ、ヴェトナム、カンボジア、フィリピン、マラヤ、シンガポール、サラワク、北ボルネオ、インドネシア、香港、日本など十五の地域諸国で、ラオスとネパールを除くほとんどすべての東南アジア諸国が参加したことになる。

このうち現地のマラヤ、シンガポールからの参加者が多かったのは当然であるとしても、オーストラリアのキャンベラ、メルボルン、シドニー、ブリスベーンなどの大学を中心として派遣された代表が十三名にもおよんだことは参加者一同に強い印象をあたえた。これらの大学には普通の歴史学部のほかに、Department of Far Eastern History, Department of Pacific History, Department of Indonesian Studies, Department of Oriental Studies などが新設され、本格的に東南アジアの歴史や地域研究が進められているのであるから、このように多数の参加をみたのも理由のないわけではない。提出

されたペーバーからみて、また会議における活潑な討論からみて、オーストラリアが近い将来に東南アジア研究の分野ですぐれた業績をあげるであろうと期待された。これは私にとっても一つの驚きであった。

アメリカからの参加者は八人でオーストラリアに次いで多かったが、エール大学のKarl Pelzer, Harry Benda、コーネル大学のGeorge McT. Kahin, John Smailなどインドネシア研究で名の通った教授たちが参加した。その他参加者の中で目ぼしい人々の名をあげれば、ロンドン大学スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズのH. Tinker、ライデン大学のH. J. de Graaf、リスボン海外歴史研究所長のA. da Silva Rego、シドニー大学のA. H. Hill、ウェリントン・ヴィクトリア大学のL. H. Palmier、香港大学のB. Harrison, E. S. Kirby、カルカッタ大学のS. P. Sen、バキスタンのS. Q. Fatimi、オロン大学のS. Arasaratnam、インドネシア大学のSoedjatmoko、ガジャマダ大学のSartono、ブルネのMa Yi Yi、フィリピンのG. F. Zaide、O. D. Corpuz、ベトナムのChen Ching Ho、マレーのJ. Bastin, Syed Hussein Alatas、シンガポールのHsu Yun-tiao, K. G. Tregoning (組織委員会委員長) などである。

これらのおもだった参加者の顔ぶれからも想像できるように、参加者は歴史研究を専門とするhistoriographersと歴史研究(主として現代史)に関心をもちsocial scientistsの二つのグループからなり立っている。したがって、報告に際して

また討論においても、前者がもっぱら史実や史料に即した実証的研究に重点をおくのにたいして、後者は史料の解釈や構成のための分析的範疇や方法的視点に議論を集中した。ヨーロッパの学者は概ね前者の立場に立ち、アメリカの学者は後者の立場に固執した。またアジアの学者のうちアメリカで教育を受けた人々は後者の観点に同調し、ヨーロッパで学んだ人々は前者の立場に傾斜した。このように参加者の構成が異質的な二つのグループに属していたことから、トピックによっては相互にはげしい応酬があつて、論点が浮彫りされる利益があつた反面、おたがいに自説を譲らぬまま対立し、論点がさらに一層掘り上げられて議論されることなしに終つたことも稀れではない。しかし歴史研究におけるdescriptiveとanalyticalとの綜合の必要についておたがいの認識が一層深まったことは、会議の一つの成果といわなければならない。

二 歴史記述的と機能分析的

会議の全日程を通して九つの部会が開かれたが、これを開催の順序によらず、主題と報告内容からみて分類すると、概ね次の二つのグループに分けることができる。

(一) 歴史記述的歴史研究 (Historiography) に属するもの

I 「東南アジアに関する史料紹介」 (Historical Source Materials in Southeast Asia) 部会

(1) Chen Ching Ho (Vietnam): Introduction to the Imperial Archives of the Nguyen Dynasty (阮朝史に關

る重要史料の分類整理状況ならびに「サットナム史料翻訳委員会」の組織と活動状況について報告。)

㉔ S. Arasaratnam (Ceylon): Some Comments on the Use of the Records of the V. O. C. as Source Material for the Writing of History (オランダ東印度会社の往復書翰、報告書等の記録の性質、特徴、史料の価値に関するコメント。)

㉕ Tom Harrison (Sarawak): Historical and Related Sources for Sarawak (マニラの博物館所蔵のサラマン史料に関する報告。)

㉖ P. L. Burns (Singapore): An Introduction to English Language Sources in the Federation of Malaya for Historical Research (一八七四—一九四二年までのマレー各州に関する英文文書の紹介。)

㉗ Ma Yi Yi (Burma): A Bibliographical Essay on the Burmese Sources for the History of the Konbaung Period 1752—1885 (マンマー国立図書館所蔵の史料、ミナマ語史料の選書目録配付。)

㉘ R. Mohammad Ali (Indonesia): The Significance of Indonesia's National Archives for South-East Asia's History. (ジャカルタの国立古文書館の史料は一六二—一九四二年までにわたる。)

II 「東南アジアの回教史」(Islamic History of Southeast Asia) 部会

㉙ H. J. de Graaf (Holland): The Origin of the Javanese Mosque (スライヤジャワインネネンのモスクの起源はインドのグジャラートのモスクの模倣であることを証明する。)

㉚ S. Q. Fatimi (Pakistan): The Role of China in the Spread of Islam in Southeast Asia (中国史料を豊富に引用しながら、イスラム以前におけるアラブと中国との海上貿易、最初の回教徒は広東に移住しモスクを建てたこと、中国の回教徒が南洋貿易の発展にはたした役割など論ずる。)

㉛ A. H. Hill (Australia): The Coming of Islam to Southeast Asia (中国資料、マニラ語資料、オランダ文献など利用する。)

III 「初期の東南アジア史」(Early Southeast Asia) 部会

㉜ Hsu Yun-t'iao (Singapore): Notes on the Historical Position of Singapore (中国資料に基づいてシンガポールの歴史上の地位を明らかにする。)

㉝ Wang Gungwu (Malaya): The Melayu Peoples in Hai-kuo Wen-chien Lu (1730) (いかなる中国資料による初期マレー人に関する研究。)

㉞ P. Wheatley (U. S. A.): Some Introductory Comments on the Economic and Social History of Early Malaya (イスラム以前のマレー半島の歴史を東南アジア文化史のコンテキストで説明する。)

㉟ Tien-Tse Chang (Singapore): Malacca and the Failure of the Portuguese Embassy to Peking (一五二七年の

右の事件を中国資料から明かにする。)

④ Fr. Manuel Teixeira (Singapore): The Influence of the Portuguese on the Malay Language. (マレー語の語彙の中に入ったポルトガル語二八〇、ポルトガル語の語彙の中に入ったマレー語二五の研究。)

Ⅳ 「マレーの歴史」 (The History of Malaya) 部会

⑤ Eunice Thio (Singapore): The British Forward Movement in the Malay Peninsula, 1880—1889. (イギリスが海峡植民地からマラ州に始まる半島内部への勢力浸透をはかる当時の歴史事情の解明。)

⑥ Kernial Singh Sandhu (Singapore): Some Impressions of the Origins and Characteristics of Indian Migration to Malaya, 1786—1957. (英領マレーへのインド移民の原因、移民の形態、募集方法(カンヤニー制度)、移民法制や行政機構等についての歴史的変遷。)

⑦ H. Groves (Singapore): Notes on the Constitution of the Federation of Malaya. (マレー連邦の憲法とマレーの制度慣習との関係を究明。)

⑧ B. J. Brown (Singapore): Justice and the Adat Perpatih: Law or Lore? (ネネリ・スンビランに移住したミナンカバウ族のアダット・プルパティの性格特徴を明らかにし、それに対するイギリス行政の与えた影響等を論ずる。)

⑨ William R. Roth (Australia): Kaum Tua—Kaum Muda: Innovation and Reaction in the Malay Community

of British Malaya, 1900—1941. (二〇世紀初頭におけるカム・トゥア対カウム・ムタの論争や運動をイスラム改革運動の観点からでなく、近代化、西欧化のコンテクストで解釈する。)

⑩ Kachorn Sukhabanij (Thailand): Siamese Documents Concerning Captain Francis Light. (バンコクの建設者として知られるフランシス・ライトの最初の活動を、タイ語による資料によって明かにする。)

Ⅴ 「東南アジアの華僑」 (The Chinese in Southeast Asia) 部会

⑪ Tan Yeok Seong (Singapore): The Sri Vijayan Inscription of Canton (A. D. 1079) (一九五九年広東の一寺院で発見された石碑文についてスリヴィジャヤに関する重要な史実を明かにする。)

⑫ Cheng Tsu-Yu (Singapore): Earlier Trace in the History of Malayan Chinese Literature (十五世紀頃からの中国語で書かれた文学作品とその内容にあらうマレー的と思われる諸作品の解説。)

⑬ Png Poh-seng (Australia): The Kuomintang in Malaya (一九二一—四九年間における国民党のマレーを中心とする活動状況について述べる。この期間における華僑のナシ・ナリズムの動向を明かにする。)

⑭ Taku Suyama (須山卓): Pang Societies and Economy of Chinese Immigrants in Southeast Asia. (幫社会の起源、歴史的変遷、組織形態、出身地別比較、特に華僑資本の幫社会

的活動の特徴について述べる。

VI 「東南アジアの経済史」(Economic History of Southeast Asia) 部会

⑧ Wong Lin Ken (Singapore): The Malayan Tin Industry: A Study on the Impact of Western Industrialization on Malaya (マレーシアの錫産業の発達と「ヨーロッパ」特に英本国との関係から述べる。)

⑨ J. Norman Parmer (U. S. A.): Attempts at Labor Organization by Chinese Workers in Certain Industries in Singapore in the 1930's (一九三〇年代のシンガポールの三つの労働組合「すなわち海員組合、パイプライン建設業および建築労働組合について」主として官庁報告書を資料として利用した。組織活動の特徴として三〇年前半は経済闘争、後半は政治的性格をおびていふことを明かにする。)

⑩ S. P. Sen (India): The Role of Indian Textiles in Southeast Asian Trade in the Seventeenth Century. (十七世紀における東南アジア貿易において「インド」綿布が主要な交換手段としてイギリス、オランダによって利用された歴史的状況を明かにする。)

⑪ I. H. Nish (Australia): British Commercial Organizations in the India-China Trade. (特に London and Liverpool East India and China Associations の報告書を中心に「それらの活動状況を明かにする」)

⑫ James Warren Gould (U. S. A.): The Effect of

American Trade on the Cultures of the Far East (アメリカとの通商的接触によってアジア極東諸国が受けた文化的影響の積極的な側面を明かにする。)

(二) 機能分析的歴史研究に属するもの

ここに機能分析的歴史研究というのはたんなる歴史記述的な態度を離れて、多かれ少かれ政治学、社会学、文化人類学などの方法を用いて歴史的事象について cross-cultural analysisを試みようとしたペーパーを指している。もちろんこれは相対的な意味で語られているので、便宜上の分類として受けとっていた。

VII 「十九世紀の植民政策」(Colonial Policies in the 19th Century) 部会

⑬ Karl J. Pelzer (U. S. A.): Western Impact on East Sumatra and North Tapanuli: The Roles of the Planter and the Missionary (西欧の衝撃が土着民社会に与えた影響を比較対照的にとらえる。東スマトラに入った栽植企業者は土着民の福祉に有害な影響を残して今日の土地問題の原因となる。タバヌリ北部のトバ・バタック族はキリスト教伝道団(Rhenish Mission) がその地域に入ったので、衛生福祉、熟練技術、教育文化の面で啓培されて、今日のインドネシアのエリート層の重要部分を形成した。)

⑭ Lea E. Williams (U. S. A.): "The Ethical Program and the Chinese of Indonesia (オランダの倫理政策は土着人たるインドネシア人の社会福祉の向上を意図したのである

が、複合社会であるために、華僑に対しては非倫理的な圧迫政策とならざるを得なかった。

③ Onofre Dizon Corpuz (Philippines): Western Colonisation and the Filipino Response. (スペイン、アメリカの外国文化の影響を認めながらもフィリピン独自の土着的文化要素の発見を、「相互的文化接触と適合」の過程の中で行わんと試みる政治社会学的研究)

④ Thomas R. McHale (U. S. A.): American Colonial Policy Towards the Philippines (アメリカが十九世紀末の植民的無関心から転向した理由を、当時の国際関係におけるバラン・オブ・パワーのコンテクストから説明しようとする)

⑤ Nicholas Tarling (Australia): Some Aspects of British Policy in the Indonesian Archipelago in the 19th Century (十九世紀後半東南アジアにおけるイギリスの政策的関心は主として貿易にあって、エンパイア形成にはなかった点を立証する)

Ⅲ「東南アジアのナショナリズムと政治」(Nationalism and Politics in Southeast Asia) 部会

⑥ Yoichi Itagaki (板垣 一): Some Aspects of Japanese Policy for Malaya under the Occupation with Special Reference to Nationalism in Malaya (占領下のマラヤに対する日本の民族政策の性格特徴を明かにし、特にマラヤの独立問題が、インドネシア民族独立問題との関連においてどうあり得た事情を明かにする。)

⑦ Leslie H. Palmer (New Zealand): Indonesian-Dutch Relations (インドネシアとオランダとの関係を悪化せしめた原因は、両国の国内政治的要因、すなわちいずれも比例代表制にもとづく多党制 (Multi-party System) のため、過激派をおさえることが困難であるという政治構造の性格から説明する。)

⑧ Sartono Kartodirdjo (Indonesia): Some Problems of the Genesis of Nationalism in Indonesia. (ナショナリズムを歴史的産物としてすなわち反植民地的運動としてとらえるのであるが、「ナショナリズム対コロニアリズムの相互作用関係」を政治、社会、経済、文化の多面的側面から究明する multi-dimensional approach を力説する。)

⑨ Vishal Singh (India): The Rise of the Indonesian Political Parties. (一九二六—二七年の共産党暴動までの初期のインドネシア諸政党的成立事情を諸種の要因から究明する。)

⑩ K. J. Ratnam (Singapore): Constitutional Government and the "Plural Society"—Some General Observations (ユニペルサル、セイロン、マラヤなどの典型的な複合社会においては、西欧の同質的社会とは異なる憲法上の配慮が必要であることを、少数民族問題やそれにとともなうコンミニナリズムを中心として討究する。)

Ⅳ「東南アジアにおける歴史教育」(The Teaching of History in Southeast Asia) 部会

⑪ Syed Hussein Alatas (Malaya): Reconstruction of

Malaysian History. (マラヤ、インドネシア、フィリピンをふくむマライシヤンの歴史における「イスラム時代」period of Islamization の正しい位置づけを強調する。おおよそ一三世紀から一六世紀にわたるイスラム時代を歴史的個性をもつ時代として再認識してマライシヤンの歴史を改造すべきことを力説する。「時代分け」periodization の規準として、宗教、権力組織、統治形態、技術、経済生活等の諸要因の変化やそれらの相互関係などをあげる。)

(4) Gregorio F. Zaide (Philippines): New Interpretation of Philippine History. (スペイン人やアメリカ人の偏見にみちた Eurocentric view を排撃し、フィリピンの政治的、経済的社会的進歩においてフィリピン人の果たした役割を強調する。正しいフィリピン史を書くこととしたホセ・リサールの精神に帰れと叫ぶ。)

(5) Wu Ching-Hong (Singapore): The Present State of Philippine and Asian Studies in the Philippines (フィリピンにおける民族学、考古学、フィリピン史学等に関するフィリピン学界の現状を報告。)

(6) Soedjatnoko (Indonesia): The Indonesian Historian and His Time.

(7) Soedjatnoko: Note on the Publication of an Indonesian Historiographical Symposium. (以上二つのペーパーにおいて「ナシヨナリズムの強烈な時代と社会との関係における現代インドネシア歴史家の悩みを述べると共に、一方におい

て地方史に関する新しい資料の発見と他方において社会科学の領域における新しい研究方法の適用によって、インドネシア史の系統的再構成のための合理的計画が可能となったこと、さらに進んでヨーロッパとアジアとの過去の関係の再評価 (re-evaluation) のために、忍耐強い努力を必要とすると結論する。)

(8) A. H. Johns (Australia): Sufism as a Category in Indonesian Literature and History (スフィズムはインドネシアの社会がイスラム化するための機能的類型的なカテゴリーであったことを、一三世紀から一八世紀までのインドネシア文学や史実の中から論証せんと試みたもの。スフィズムの定義については問題があるが、「時代分け」に関する一つの方法論的な視点を提示した。)

(9) John R. W. Smail (U. S. A.): On the Possibility of an Autonomous History of Southeast Asia. (伝統的なヨーロッパ中心の東南アジア植民史の立場を離れて、独自の社会的文化的個性をもつ主体的自主的な東南アジア史の可能性について、特にインドネシア史を例にとって議論する。主体的なインドネシア史の可能性をアチヌ史の主体的な理解を基礎として論証せんとする。アチヌ史の主体的な理解とは、彼によれば、世俗的エリートとしてのウンバンラン Uleebalang と宗教的エリートとしてのウラム Uluam との関係における政治的、社会的、文化的 relative importance を規準として考察することを意味する。スマイルはギブツ (C. Geertz) がジャバ社会につい

Abangan, Santri, Priyayi の仮説を用いて試みたと同手法をアチェ社会の構造分析に適用した。)

三 歴史の書き改め

この会議において最も白熱の議論のやりとりがあったのは、右の最後にのべた「東南アジアにおける歴史教育」の部会であった。歴史教育の問題は「国民教育」(National Education)の根本問題につながる問題であり、それは必然的に新しい「国民史」(National History)を要求する。いまや新興独立国家のアジアの歴史家たちはそれぞれの国民史の新しい書き改めの大きな責任を課せられている。報告や討論の中でこれまでの伝統的な歴史の new interpretation とか reconstruction とか re-evaluation とか、このような言葉がいくたび語られたことか。セイロンのアラサラトナム教授が「アジアの歴史は永いあいだヨーロッパ史の脚註ないし附録として書かれてきた。それはヨーロッパ人の膨脹主義者の歪められた価値判断と偏見にもとづいて書かれてきた。いまやアジアの歴史家たちは、自主的な民族の歴史を再建しなければならない。しかしながらわれわれは被征服者の新しい歴史を征服者の古い記録から書かねばならぬというディレンマに立っている。われわれはたんに反動的な民族主義的偏見から歴史を書き改めるという危険と誘惑を乗り越えて、利用しうる史料の批判的吟味と新しい科学的処理を通して立派に再建の仕事をはたさねばならない」と述べたのは人々に深い感銘を与えた。

たしかに歴史の書き改めは史料の批判的選択と新しい科学的接近方法の問題に帰する。歴史はあくまでも事実に基づきおかなければならない。しかし歴史に形態をあたえるものは事実の選択であり、歴史に生命をあたえるものは事実の解釈である。そしてこの選択と解釈の規準となるものは社会科学の新しい操作によって発見された「分析的範疇」(analytical category)でなければならぬ。このような問題意識のもとにインドネシア史の書き改めを大胆に行ったファン・リユール (Jacob Cornelis van Leur: Indonesian Trade and Society, The Hague 1955) が、彼の著作のいたるところで「アジア史の書き改めにとって最も必要なことは、"system of categories of its own, built up with the available factual material" と述べたのは、このような分析的範疇の重要性を指摘したのである。ファン・リユールは一九〇〇年から一九〇〇年までのインドネシア社会について、伝統的な植民史に挑戦して、新しい自主的なインドネシア史 (Autonomous Indonesian History) を書いたが、そのとき用いた分析的範疇はインドネシア社会における「政治的・軍事的権力と経済的な力」(political-military power and economic strength)であった。この分析的規準は、John Smal の報告の中で、二〇世紀までのインドネシア史の統一の連続的把握に役立たないものとして批判され、新しく社会的、文化的構造のコンテクストの中で再検討されるべきことが指摘された。いずれにしても、国民史の改造再建の問題は、新しい接近方法による新しい分析的範疇の基礎の上でなしとげられ

なければならないのである。このような認識が会議参加者の共同財産になったことは一つの重要な成果といわなければならない。

自主的な「国民史」との関連で、自主的な地域史 (Regional History) と「東南アジア史」 (Southeast Asian History) が可能であるかどうかについて、これを肯定する Benda や Smail と、これを否定する Tinker や Sen とのあいだに激しい論争がたたかわされたが結論はでなかった。ギリシア・ローマの文化遺産とキリスト教共同体を共通の基礎として形成されたヨーロッパ社会について考えられる「ヨーロッパ史」と、それとアナログスの意味でも共通の基礎をもたない東南アジア社会についての「東南アジア史」とは、同日に談ずることはできないであろう。しかしティンカーのいうように country by country, period by period として全く孤立的にのみ取り扱うことは、国民史と国民史との接触交渉面における矛盾や背反を処理し得ないことになるであろう。たとえば Unified History of Southeast Asia が不可能であるとしても、なんらかの分

析的範疇を用いて structural picture of the whole area をえがくことは可能であろう。而して各国国民史はこのような全地域の構図としての東南アジアの歴史像の中に、それぞれの正しい相対的位置を占めるべきであろう。

歴史の書き改めはいかなる意味においても決して容易なことではない。しかし植民地アジアと独立アジアとを、連統的・統一的・主体的に把握するための新しい歴史的接近方法に関して、示唆に富む報告や討論があったことは、書き改めへの一歩前進として、今回のシンガポール会議の意義を高く評価しなければならぬ。

(附記)

東南アジア史学に関する学界展望として推賞すべき参考文献に、ロンドン大学東南アジア史教授として令名のあるホール氏のものがあつた。D. G. E. Hall: East Asian History Today. Lecture delivered in the University of Hong Kong on May 20th, 1959. Hong Kong University Press 1959. 18 pp.

(一橋大学教授)